

成人向

**CRAZY
TIGER**

**THE
HYPERMAN**



後藤響子(キョーコ) 26歳 独身
昼間は喫茶店の店長として働き
つつ、シヤワー前の散歩と称して
夜な夜な街を自主的にパトロール
しては正義を執行する女。



子供からカツアゲするような不
良から人身売買をする犯罪組織ま
で、等しくその暴力で恐怖のどん
底に叩き落す。響子の考える罪の
重さによってそこに程度の差はあ
るが。

女という理由だけで対峙した者
は嘲るが、彼女の力を目の当たり
にした者は皆一様に悪夢にうなさ
れるという。そこが病院のベッド
の上であろうと、刑務所の中であ
ろうと。

その暴力の凄まじさに、ついた
あだ名は『狂虎』。実際に虎の姿を
見たという者もいるようだが、真
実は定かではない。



この日、響子はいつも通りにパ
トロールをしながら、カツアゲを
するチンピラや女性を囲む暴漢、
果てはそこから関係するギャング
のアジトまで、その時に目につい
た悪人たちを破壊して回っていた。
まるでルーティンワークのよう
に悪人を病院送りにし続けていた
が、その日はいつもとは違う抵抗
が目についた。

小癪にも催涙スプレーのような
ものを使用する者が数人現れたが、
しかしそれを多少吸い込んだとこ
ろで響子が怯むことはなかった。

響子は至っていつも通りにパト
ロールを終えたが、しかし身体の中
の異変が徐々に進行しているの
をすぐには気付いていなかった。

翌日から、風邪も引いたことがない響子は生まれて初めて体調不良というものを体験した。
普段は無表情でクールな印象を与えることが多かった響子だが、この日は眉をしかめて気だるげに椅子に座っていることが多かった。

初めての感覚に戸惑いつつ、しかし昨晩にあった出来事は彼女にとって平凡な日常として記憶の隅に追いやられていたために、思い当たることもなくなんだか晴れない気分で一日を過ごしていた。

響子の活動を唯一知っている従業員夏美は、殺しても死なないと思っていた響子の様子を心配していた。
そして、とある提案をするところからトラブルが始まるのであった。



キョーコさん
今日どうしたんですか？

なんだか調子
悪そうですけど…

ん？
…うーん

キョーコさんが体調崩す
なんて相当ですよ…？
早く病院に行った方が
良いんじゃない？

病院…ねえ

今まで病院に行つたことが
ないんだが…安全なのか？

ええ…？
そんなこと考えた
こともないですよ

風邪ひいたら普通に
病院に行くし…

トントン

それに：そんな状態じゃ
夜のアレも休まなきゃダメ
ですよ？

絶対に危険です！

…仕方ないねえ

それじゃあ明日も
この調子なら…
…それでいい？

今日はもう休むよ
店の方は頼んだよ

響子は何故か病院に行くことを
決っていたが、彼女の第六感とも
いうべきものが何かを察知してい
たのかもしれない。

…フゥ

この日、響子は夜の日課をする
ことなくベッドに入った。
そして結果として翌日も体調が
優れず、渋谷病院へ向かうことに
するのだった。

響子は子供の頃から頑丈で、病院に行く必要に迫られたことが皆無だった。
社会人であれば健康診断等の機会もあるはずだが、何故か響子はその経験もなかったようだ。
この街の病院の場所もパトロールをしていた結果知ったほどで、彼女にとってはまったくの未知の世界と言ってよかった。

今日はどうされましたか？

ザシ

響子が初めて認識した医者という人物は、物腰は柔らかで柔らかな雰囲気があった。
初めての診察に初めての検査、病院内のあらゆることが初めて続きで、医者の話すこともとりあえずはそういうものなんだと納得して聞いた。
しかし興味の無いことにはところん興味が無いという彼女の性格。それが彼女の知識を偏らせ、この後の事態を悪化させる要因になる。とは彼女自身も考えていなかった。

医者はあくまで柔和な表情を崩さず、穏やかな雰囲気ですべてを進めた。
しかしその表情の裏に黒い感情が隠れているのを、響子は気付けないでいた。

それでは失礼
しますねー

フ...

モミモミ

グハッ

グハッ

医者横に控えていた女性看護
師がおもむろに響子の背後に立ち、
彼女の服を捲り上げた。
そしてあらわになった乳房をさ
も当然のことのように驚掴みにし、
いやらしく揉みだき始めた。
相手が女性だったこともあって
か、そういうもののなるうとし
ばらく流れに身を任せるうち、自
分の体温が徐々に上がって汗ばん
でくるのを感じた。



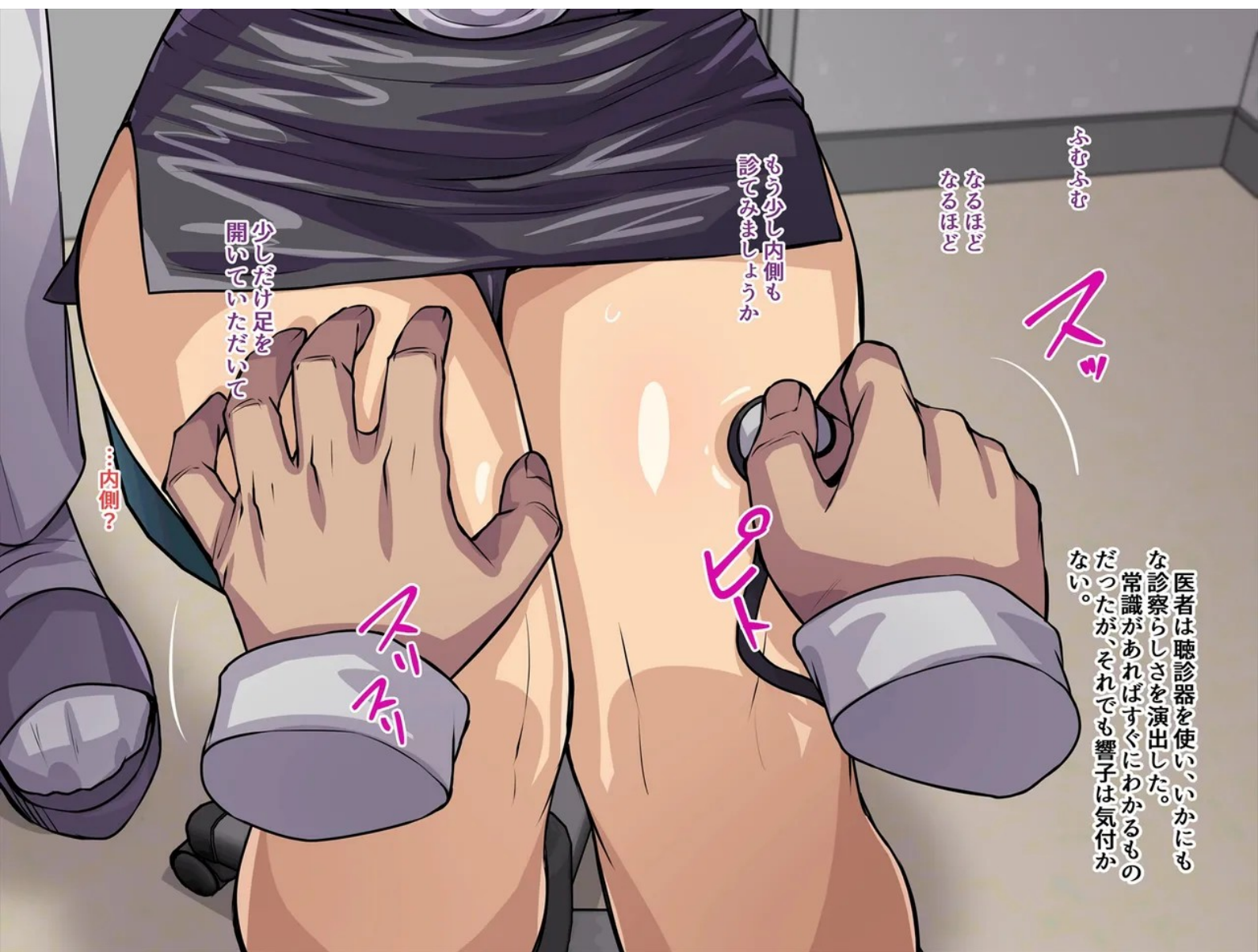
ふーん？

足の方も診て
おきましようか

イラ

イッ

医者の視線は時折、獲物を品定めするようなものに変わっていた。響子は当然そうだった動きには気付いていたが、しかしその意味するところには気付いていなかった。



ふむふむ

なるほど
なるほど

アッ

もう少し内側も
診てみましょうか

少しだけ足を
開いていただいて

...内側?

アッ
アッ

アッ
アッ

医者：聴診器を使い、いかにも
診察らしさを演出した。
常識があればすぐにわかるもの
だった。それでも響きは気付か
ない。

……どうか？

そうです
そうです

内側には太い血管とか
大事な部分が多いです
からね

ふーん？

響子の頭は疑問でいっぱいだった
が、それでも医者には素直に従
った。
響子の戦いの中で磨かれた野性
的とも言える危機察知能力は命の
やり取りにしか働かないようで、
性に興味もない彼女は格好の獲物
と言えた。

19 カッ

ここが一番診察
しやすいんですが

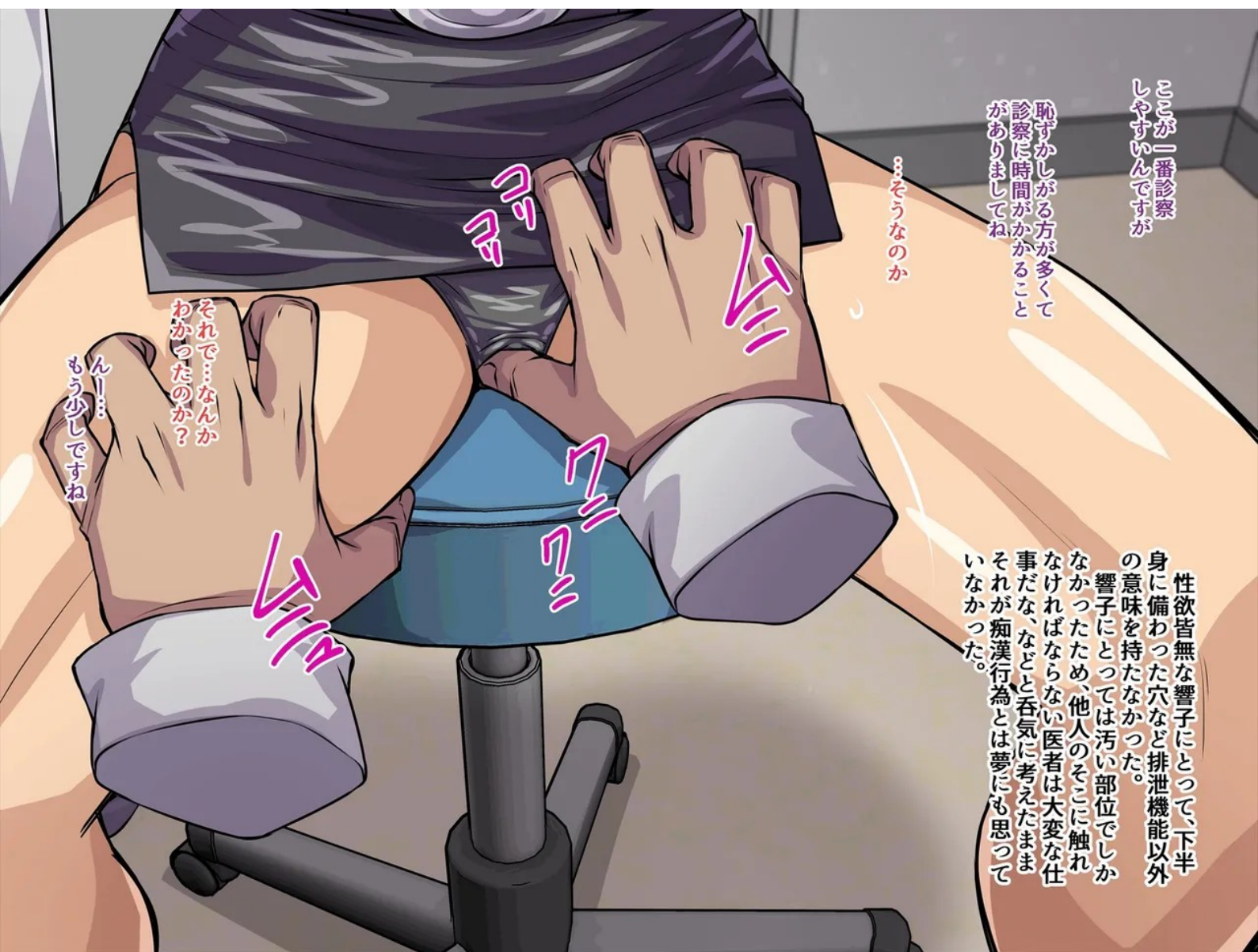
恥ずかしがる方が多くて
診察に時間がかかること
がありますね

…そうなのか

性欲皆無な響子にとって、下半
身に備わった穴など排泄機能以外
の意味を持たなかった。
響子にとっては汚い部位でしか
なかったため、他人のそこに触れ
なければならぬ医者は大変な仕
事だな、などと呑気に考えたまま
それが痴漢行為とは夢にも思っ
ていなかった。

それで…なんか
わかったのか？

ん！…
もう少しですね



ちよつと失礼
しますね

グニ
アハハ

…お…おい

んー…
この匂いは…

ピワン

何か毒性の物を
吸い込んだんじや
ないですか？

モミ
モミ

何か…吸い込んだ？
…うーん

最近…危険なスプレーが
出回ってまして…

スプレー…？
そういえば…
あったと言え
ば…あったよう

医者は突拍子もなく響子の股間
に鼻を擦りつけ、原因と思われる
出来事を言い当てた。
それにより記憶が呼び起こされ
た響子は、何かスプレーのような
ものを吸い込んだことを思い出し
ていた。
こんな訳の分からないことで原
因を絞り込むとは、これが医者と
いうものか…響子はそんなことを
考えていた。

アハハ

しかし、そもそも発端となった
スプレーの裏にこの病院の存在が
あること、そしてこれが響子を狙
って仕組まれたものであることを
まだ彼女は気付けなかった。

味もわかればもつと
絞り込めるんですが

…味？
…なんの…

あちらを立てればこちらが立たずとでも言うのか、響子は常識外れな強さと美貌を持つ代わりに、常識の欠如という大きな弱点を抱えていた。
そこには医者も内心驚いており、裏の世界のあらゆる人間に恐怖を刻み込んできた響子が、こうも簡単に制御できるとは思っていなかった。
そしてこれは、響子を葬る大きなチャンスだとも考えていた。



この分泌液の
味ですね

…お…おい…
医者ってそんなこと
までするのか…

医療用語でクンニと
呼ばれる方法なんです
舌で症状を判断するんです

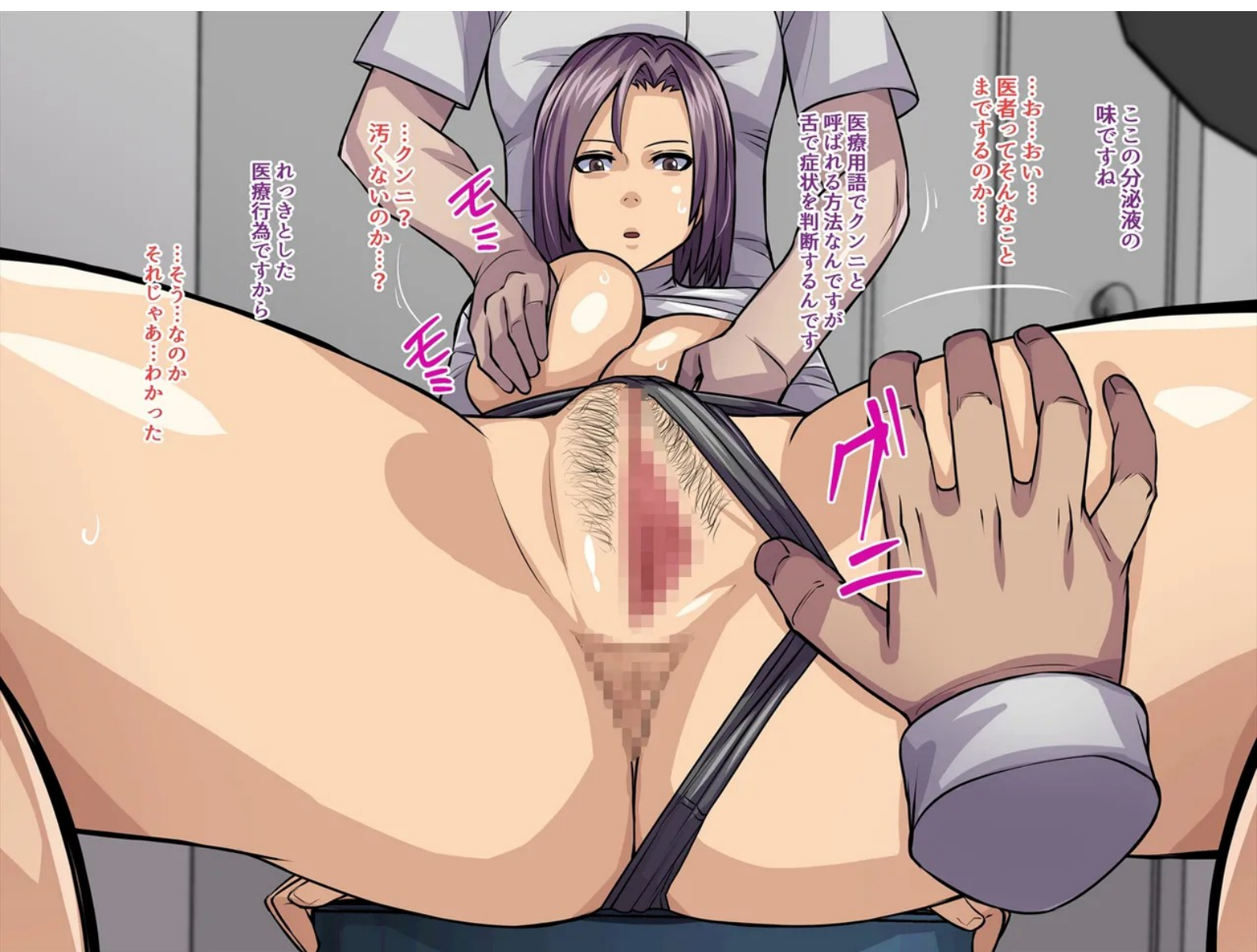
モミ
モミ

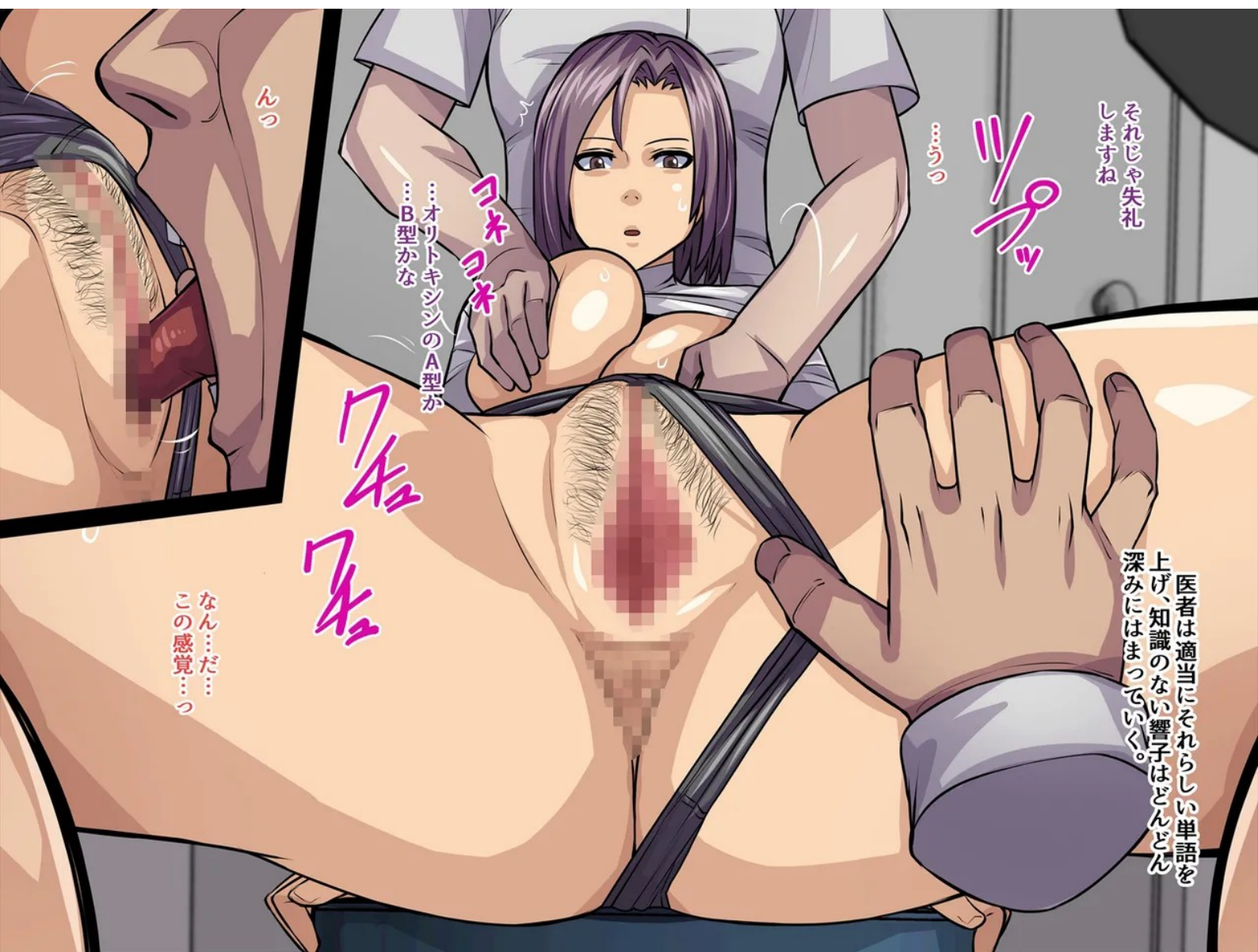
…クンニ？
汚くないのか…？

れつきとした
医療行為ですから

…そう…なのか
それじゃあ…わかった

グ
ニ





それじゃ失礼
しますね

ツツ

...うっ

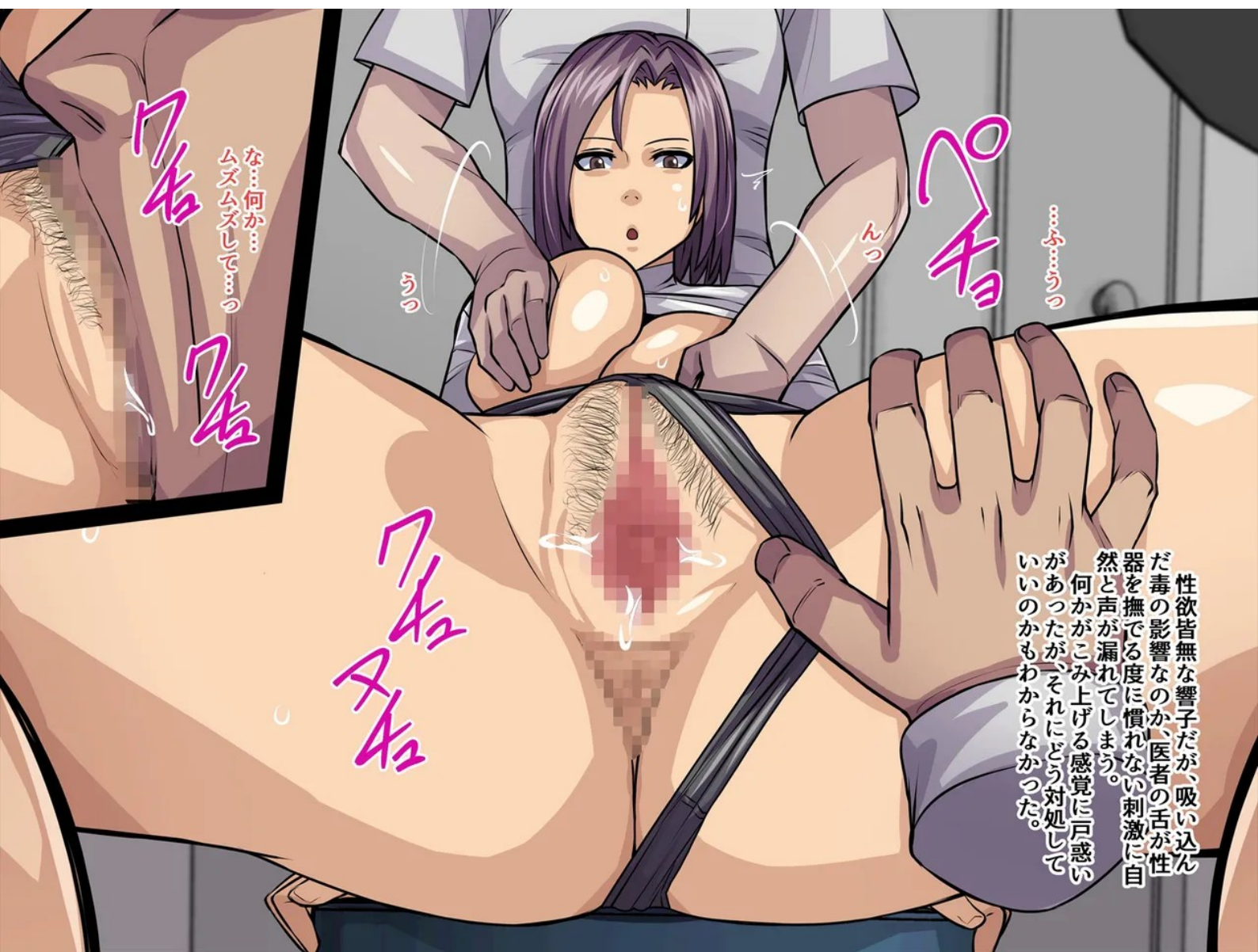
コネコネ

...オリトキシシンのA型が
...B型かな

ワキワキ

なん...だ...
この感覚...っ

医者は適当にそれらしい単語を
上げ、知識のない響きはどうとん
深みにはまっていくな。



性欲皆無な響子だが、吸い込んだ毒の影響なのか、医者の舌が性器を撫でる度に慣れない刺激に自然と声が漏れてしまう。
何かがこみ上げる感覚に戸惑いがあったが、それにどう対処していいのかもわからなかった。

な...何か...
ムズムズして...

ワッ
ワッ

ふ...うっ

うっ

んっ



この味とこの汁気で
完全に特定できましたよ

んっ

今日だったら他の患者さんの
予約も入っていないので
治療していくことができますよ

…治療が

少しだけ時間がかかるので
予約が必要なんです

今日じゃなければ予約を取って
また来てもらうことになりますね

うーん…わかった…
また来るのも面倒だしな

響子は初めて絶頂に達してしま
い、医者のお元をベトベトに濡ら
してしまった。
しかし医者はさも当然のように
治療の話をでっち上げ、響子を帰
らせまいとした。
そこに面倒を嫌う響子の性格が
見事に合致してしまい、彼女は今
までで一番長い一日を過ごすはめ
になるのだった。

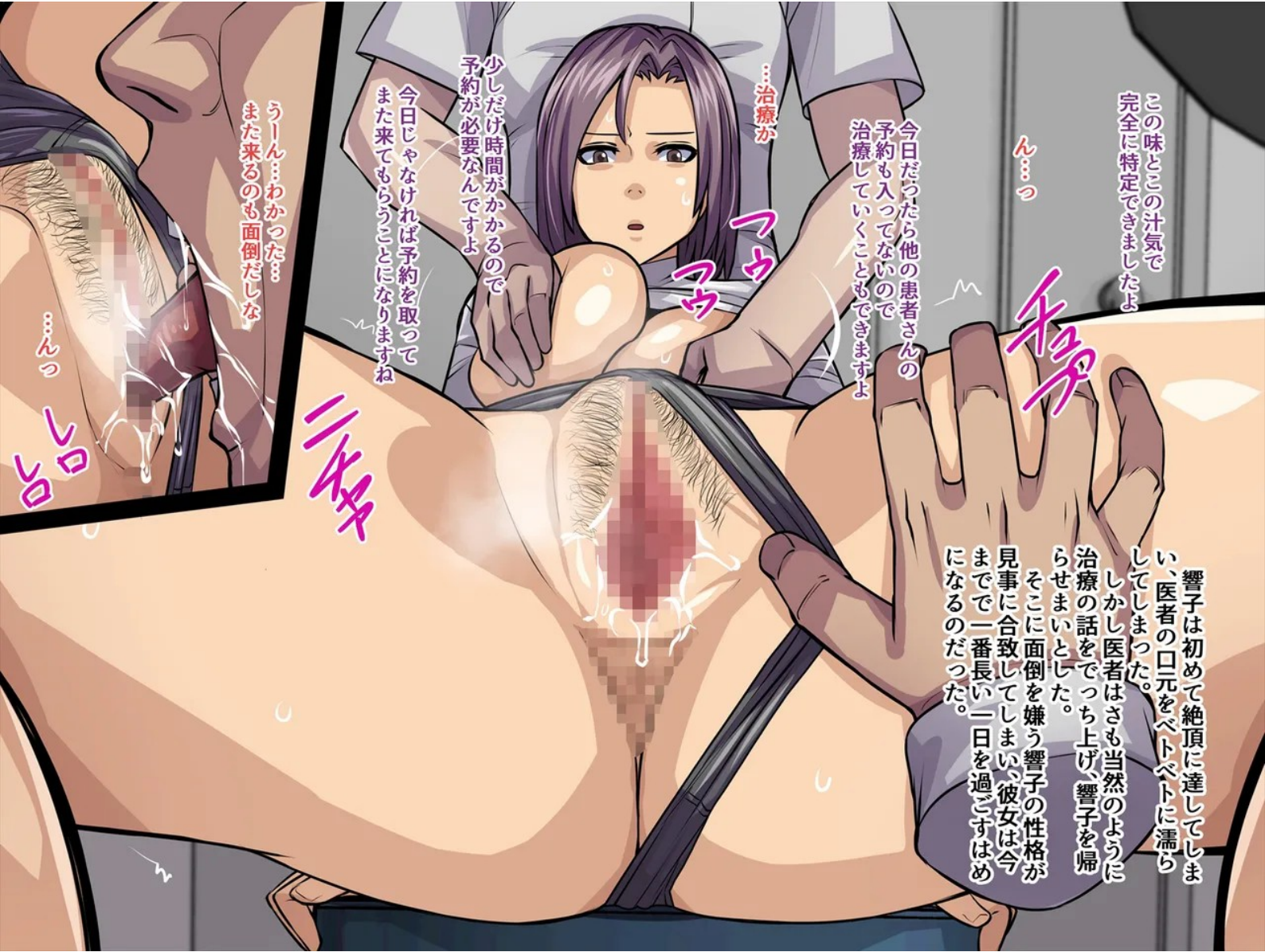
ニヤ

っ
っ
っ

キ

んっ

し
り



この毒素はですね
特に下腹部の方に溜まる
傾向がありまして

だから先ほどのように
異常に分泌液が出たりとか

触れた時の感覚が
いつもより鋭くなるとか

まあそういう異常が
出てくるんですね

…なるほどな
そういう…

免疫機能の働きで
身体から排出される
汗や尿などにも毒素は
混じって出ていくんですが

女性器の分泌液や腸液に
特に多く混じることも
研究でわかってまして

その分泌を促すのが
治療として一番早く
て確実なんですよ

響子にとつてここ数十分の出来
事が初めてと驚きの連続で、医者が
それを治療に必要な薬だと言え
ばそういうものなんだろうと納得
してしまった。

しかし治療薬と称して医者が用
意したものは、響子の余りある力
を削ぎ、そして同時に彼女を性玩
具へと変貌させるための特製の媚
薬だった。

ふーん…?

ピン

グイ

ムニ

治療の手順を簡単に
説明しますね

まず始めにこちらのお薬を
お尻の中に注入しまして



このお薬が身体の中の毒素を
下腹部に集めてくれますので

あとはこちらで毒素を
排出させるお手伝いを
する...という形です

...それで...終わりか？

溜まっている毒素の
量にもよりますが
これだけです

ズ
ズ

...わかった
さつさと済ませてくれ



…んっ

ちよつと便意を催す
と思いますが

薬がしつかり効くまで
我慢してくださいね

…あ…ああ

ひびく

ズン



変な...感触だな...

...うっ

うっ

腸内に詰め込まないと
効果も薄いので

あと何本か
使いますからね

ピン

...んっ

そう...なのか...

グ
グ
グ

ぐ
ぐ
ぐ

響子の腸内にはもつたりとした
ゼリー状のものが詰め込まれ、彼
女の粘膜はぐんぐんと媚薬を吸収
し始めてしまう。



うう...っ

も...漏れそう...だっ

ブルブル

蓋を用意しますから
ちよつと待ってください

は...早く...
してくれ...っ

フ、フ、

ハッ

ハッ

巨大な注射器が何本も空になり、
響子の尻の穴からドロリとした媚
薬が溢れ始めていた。
響子は律義にもそれが漏れない
ように我慢し、敏感になる肛門を
ヒクつかせた。





こ...これ...
治ってる...のか...?

薬が徐々に効いている
正常な反応なので心配
いりませんよ

薬が効いて毒素が
集まってくると

その分その場所の
刺激が強くなりますが

そこを超えれば徐々に
収まっていきますからね

そ...そうか...
...わかった

プルプル

ハァ
ハァ

響子はいたって真面目に治療に
取り組み、医者話を聞いた。
しかしその実態は媚薬を流腸さ
れ、さらにはアナルビーズまで挿
入された無様なものだった。
医者は裏の仕事の邪魔者を手中
に収められそうな気配に、内心で
は笑いが止まらなかった。

立つのも大変かも
じれませんが

分泌物は下に落ちて
いきますので

このままこちらで
かき出しますね

あ...ああ...

どうしても大変なら別の
体勢でも良いですからね

ハッ
ハッ

モミ
モミ

グ
グ

ハ
ハ

...わかった
とりあえず...
このまま頼む...

媚薬の効果によって時間が経つ
ほどに響子の力は削がれ、更には
尻の穴に挿入されたアナルビーズ
の刺激で、身体を支えなければ立
つことも難しかった。
そしてまだ医者も女性看護師も
治療であるという体を崩さないた
め、響子もそのつもりで身体を委
ねた。



…うっ

すごくヌルヌルですね

毒素が沢山排出されてる
証拠ですよ

なんだか…変な
感覚だ…

とにかく…早く
終わらせてくれ…

これは慎重にやらないと
腔内を傷つけて
しまうんですが

…んっ

なるべく傷がつかない
ように急ぎますね

んっ…
頼む…

ズグ

ニグ

ワグ
ワグ



ん...おっ

まずは膣内をほぐして
慣らしつつ

ふ...うっ

段々と急いで
いきますからね

...うっ
ピクッ

モミ

ググッ

ググッ
ググッ

響子の身体は徐々に敏感さを増し、膣内に侵入した指が少し動くだけで下腹部が痙攣して何度も体勢を崩しかけた。
この時、自分の身体が何か別のものに変わっていく感覚に、響子ほどの人物でもほんの少しだけ不安を覚えていた。



沢山出てきますよー
順調です

あつ

あつ

あつ

ま...まだ終わらない
のか...

まだ治療は始まった
ばかりですから

ぐっ

あ...あつ

グググ

グググ

グググ

グググ

グググ

グググ



まだ...なのか...?

分泌液がまだまだ
多いですから

まだ我慢して
ください

フッ

うう...っ

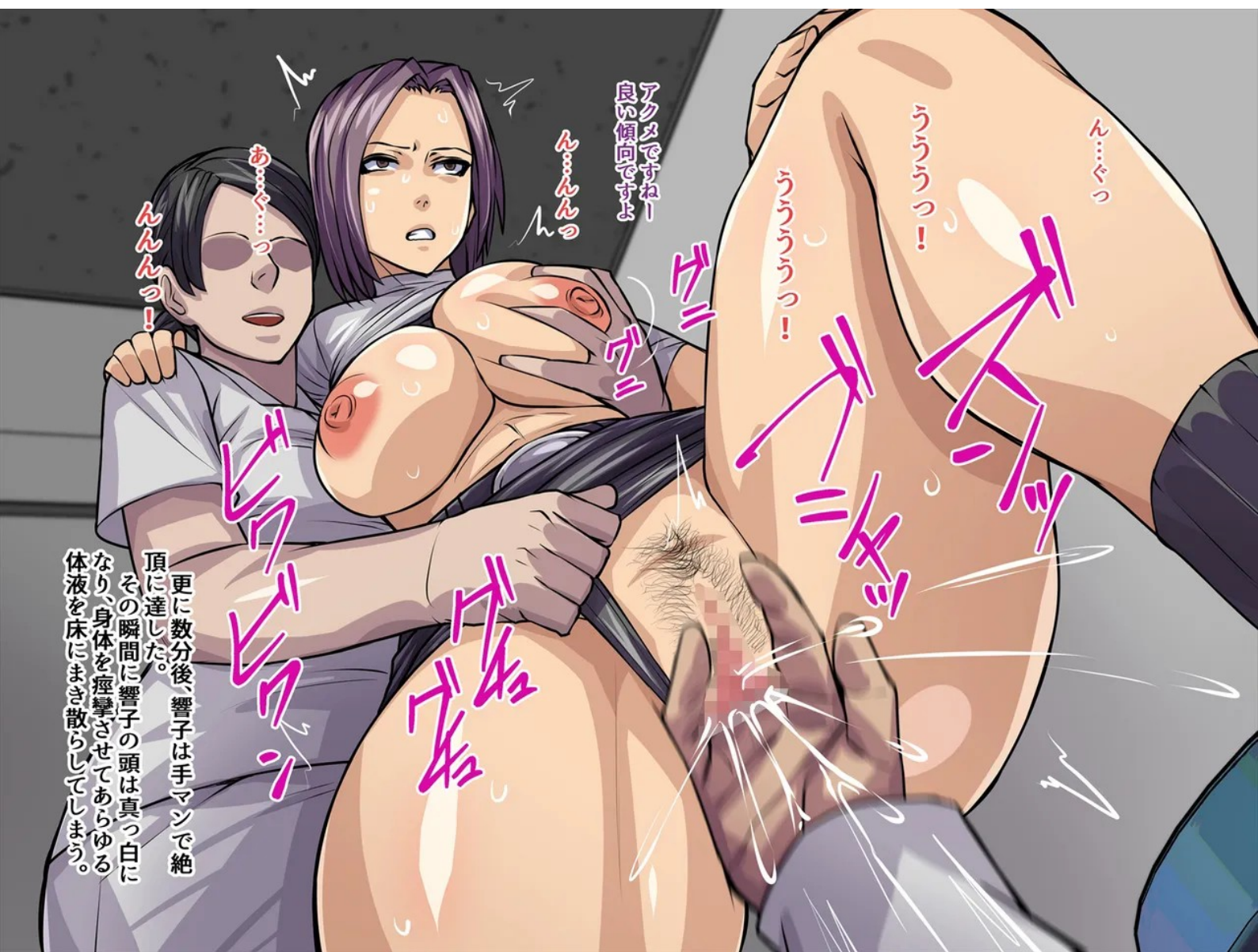
んん...んっ

ガッ
ガッ

治療と称したその行為は数分間
続いたが、響子にとってはもっとと
長い時間のよう感じられた。
そしてまたも、何かがこみ上げ
る感覚に頭が痺れ、思考がぼやけ
始めていた。

グッ
グッ
グッ

グッ
グッ
グッ



アクメですねー
良い傾向ですよ

ん…ん…ん

あ…ん…ん…ん
ん…ん…ん

ん…ん…ん

ん…ん…ん

ん…ん…ん

グ…グ…グ

グ…グ…グ

グ…グ…グ

グ…グ…グ

更に数分後、響子は手マンで絶頂に達した。
その瞬間に響子の頭は真っ白になり、身体を痙攣させてあらゆる体液を床にまき散らしてしまう。

ま...また...
なんだ...これ...
終わったのか...?

今のは医学用語で
アクメと言いまして

日本語ではイクとも
言います

イク...?

身体の免疫反応で代謝
を早めてくれるんです

治りも早くなるので
もっと沢山イケるよ
うに意識しましょう

ハッ
ハッ

...そう...なのか?

とにかく...その...

イク...?

...イケば...良いんだな?

記録が必要ですので
イク時にはイクと教
えてくださいね

...わかった

ト
ー

ン
ン
ン





それじゃあ続きを
しましょうね

ん...うつ

穴も柔らかくなつて
ほぐれてますね

この調子なら
治りも早いですよ

ズグッ

んっ

沢山イツで早く治し
ましようね

あ...ああ...

ズグッ

ズグッ







う...あ...っ

と...止まらない...っ

失禁する方は
珍しくないですし

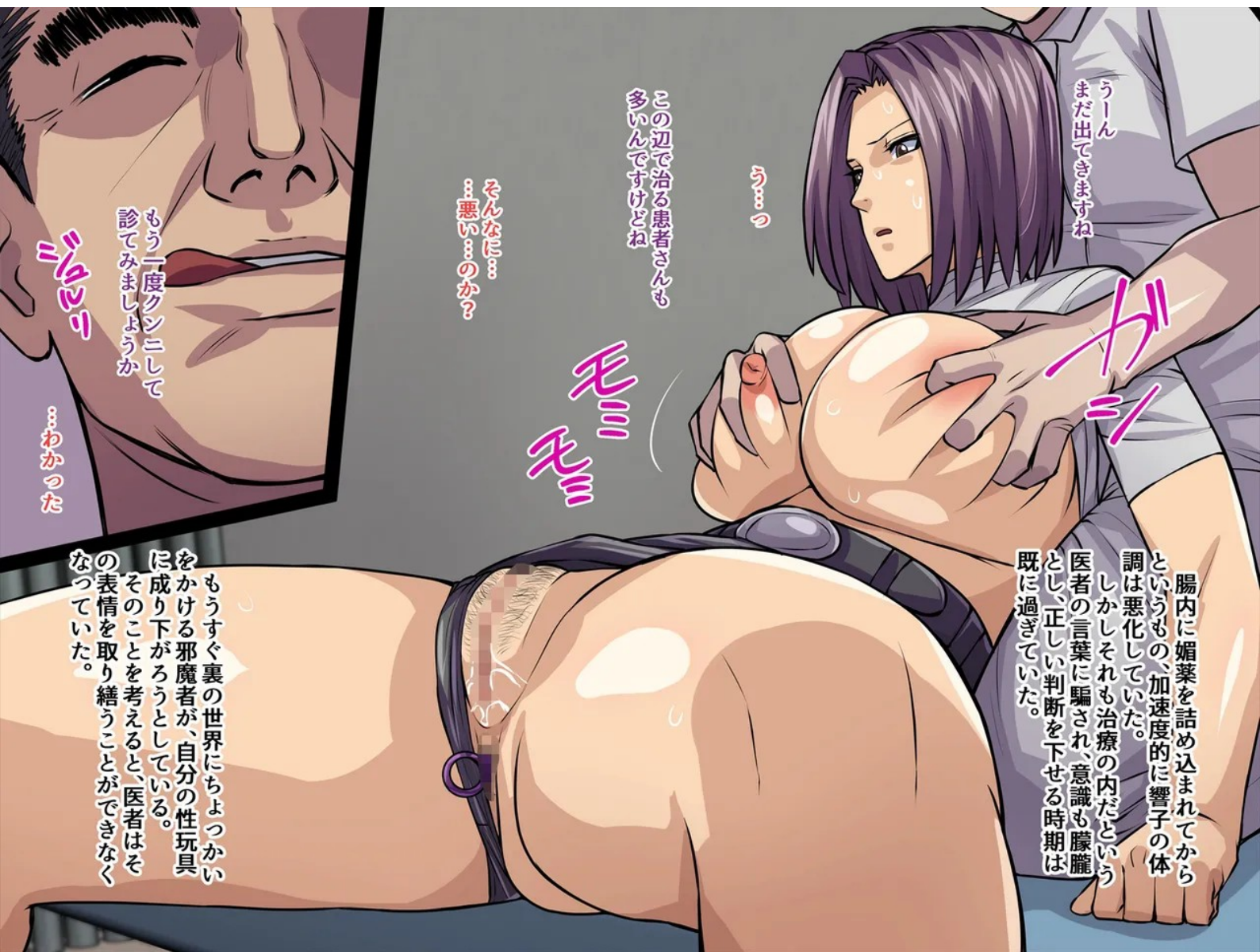
床はこちらで掃除
するので大丈夫ですよ

ハッ
ハッ

落ちていたら次の
治療に移りましょうね

っ...次...
わかった...少し
待って...くれ...

響子の身体はこの数分の間にも
敏感さを増し、いとも簡単に絶頂
してその場で失禁してしまった。
既に響子は戦うことなどできな
い状態に思えたが、医者は慎重に
慎重を重ねて『治療』を続けた。



うーん
まだ出てきますね

う...っ

この辺で治る患者さんも
多いんですけどね

そんなに...
...悪い...のか?

腸内に媚薬を詰め込まれてから
というものの、加速度的に響子の体
調は悪化していた。
しかしそれも治療の内だという
医者言葉に騙され、意識も朦朧
とし、正しい判断を下せる時期は
既に過ぎていた。

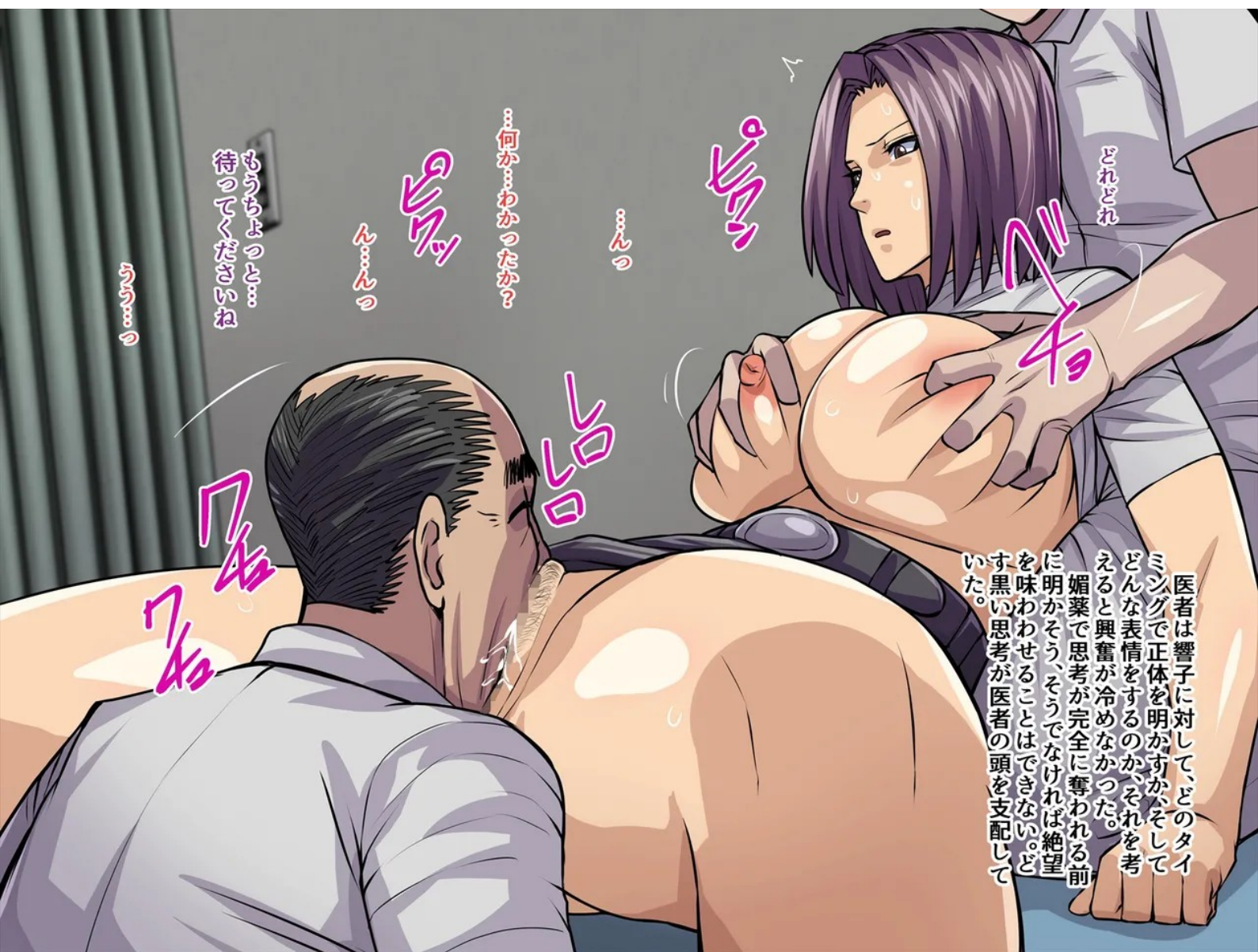
モミ
モミ

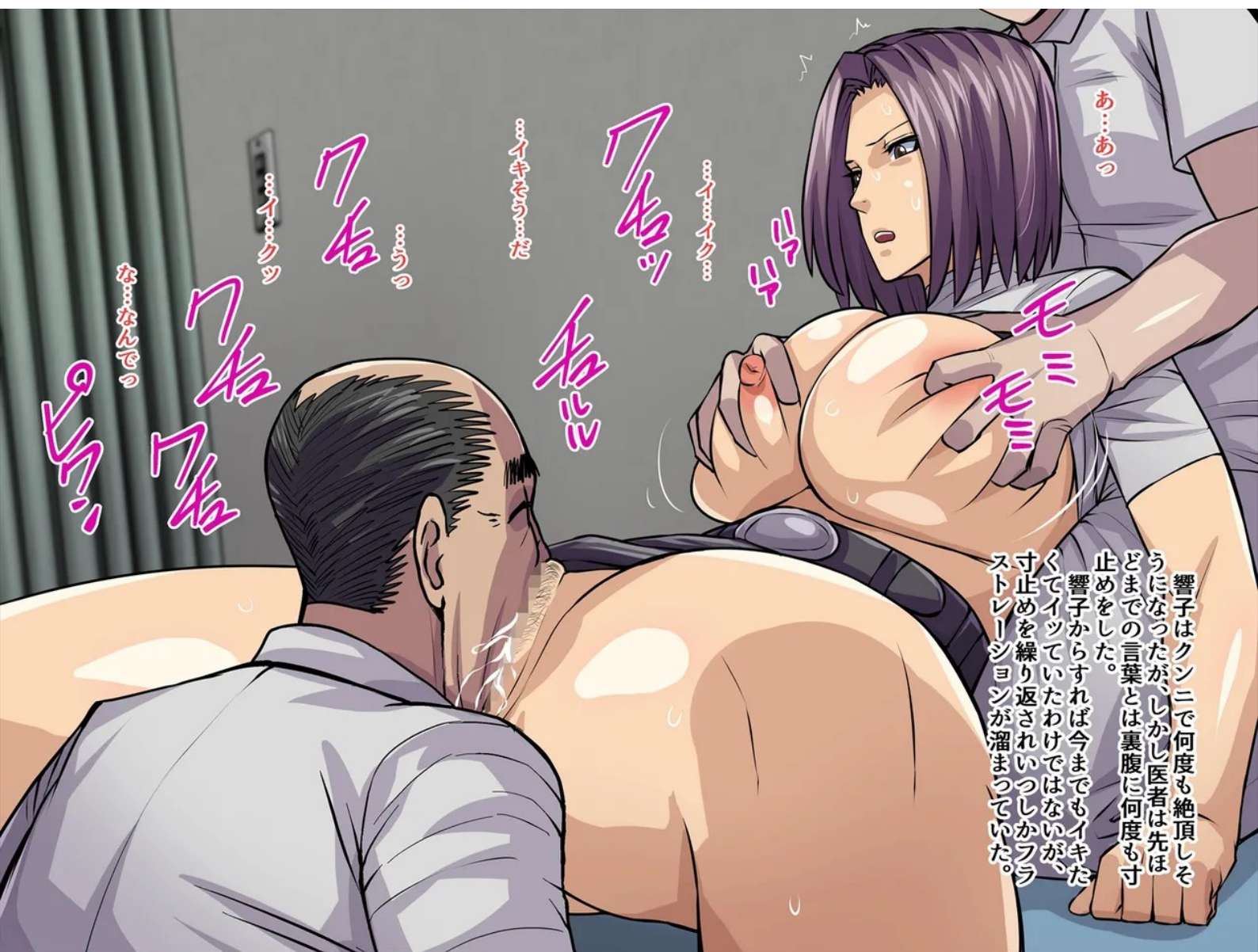
ガッ

もう一度クシニして
診てみましょうか

...わかった

もうすぐ裏の世界にちよつかい
をかける邪魔者が、自分の性玩具
に成り下がろうとしている。
そのことを考えると、医者はそ
の表情を取り繕うことができな
なっていた。





あ...あつ

...イイク...

フツッ

...イキそう...

うっ

フツ

...イイクッ

な...なんでっ

フツ

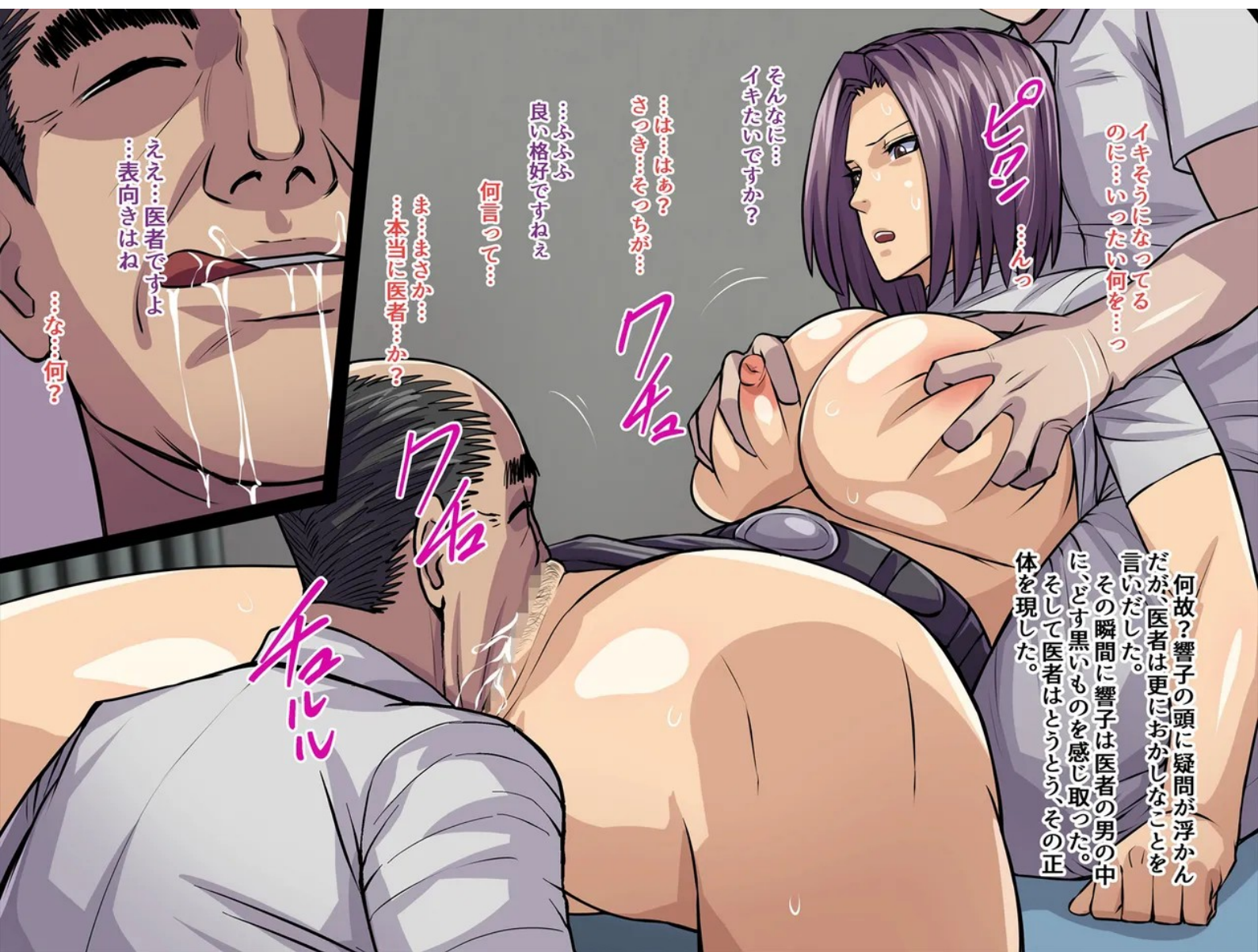
フツ

フツ

ワッ

モミ

響子はクンニで何度も絶頂しそ
うになつたが、しかし医者は先ほ
どまでの言葉とは裏腹に何度も寸
止めをした。
響子からすれば今までもイキた
くてイッていたわけではないが、
寸止めを繰り返されいつしかフラ
ストレーションが溜まつていた。



イキそうになつてるのに...いったい何を...

何故? 響子の頭に疑問が浮かんだが、医者は更におかしなことを言い出した。その瞬間に響子は医者の男の中に、どす黒いものを感じ取った。そして医者はとうとう、その正体を現した。

そんなに...イキたいですか?

...は...はあ? さつき...そちが...

...ふふふ 良い格好ですねえ

何言つて...

ま...まさか...
...本当に医者...か?

ええ...医者ですよ...表向きはね

...な...何?



イクだのイカないだのと
嘘に決まってるでしょう

これで症状が改善する
なんてある訳がない

…なっ

イクというのはね…身体が
快感を覚えた証なんですよ

何言ってる…っ

あなたは私の尻に
ハマったんですよ

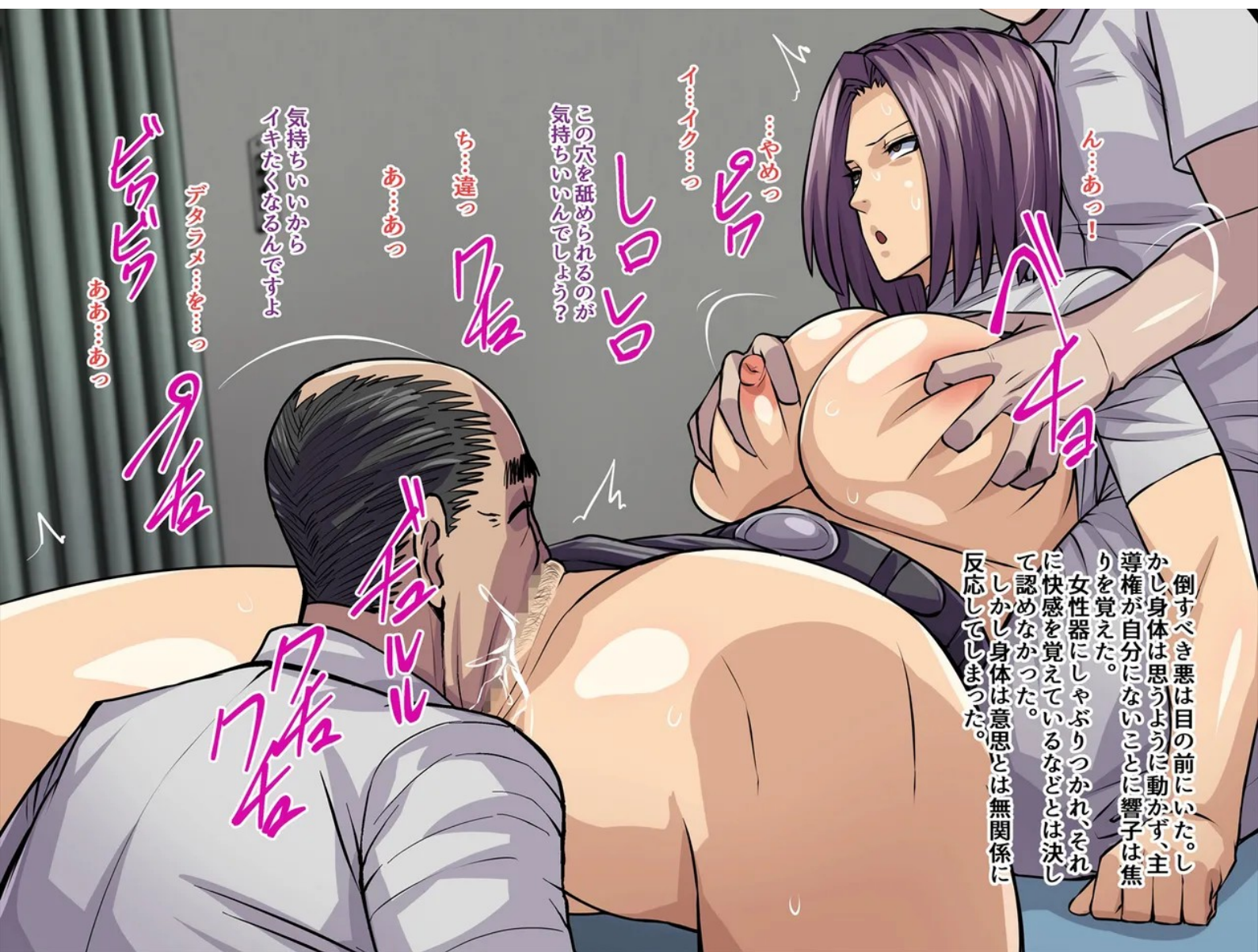
…何…っ

あなたは裏社会を相手に
暴れ過ぎたんですよ

グググ

アッ

グググ



ん...あつ!

...やめっ

イ...イク...っ

この穴を舐められるのが
気持ちいいんでしょう?

ち...違っ

あ...あつ

気持ちいいから
イキたくなるんですよ

デタラメ...を...っ

ああ...あつ

倒すべき悪は目の前にいた。し
かし身体は思うように動かず、主
導権が自分がないことに響子は焦
りを覚えた。
女性器にしゃぶりつかれ、それ
に快感を覚えているなどとは決し
て認めなかった。
しかし身体は意思とは無関係に
反応してしまった。





この薬はね…治療薬
なんかじゃなく

君のような女を玩具に
変える薬なんですよ

なんだと…っ

ふざける…な…っ

君の活躍は聞いて
いたから

まさかこんなに
スムーズに使わせて
もらえるとはね

…くっ





さ...触るな...っ

中の物...
出したいでしょ...っ

これがお腹に残るほど
抵抗が難しくなるんで
すから

と...トイレに...っ

...行かせると
思いますか？

ぐ...っ

ガ
=

ム
ム
ム

ガ
ワ
ガ
ワ



うあああ...あつ

ほらほら
出てきますよー

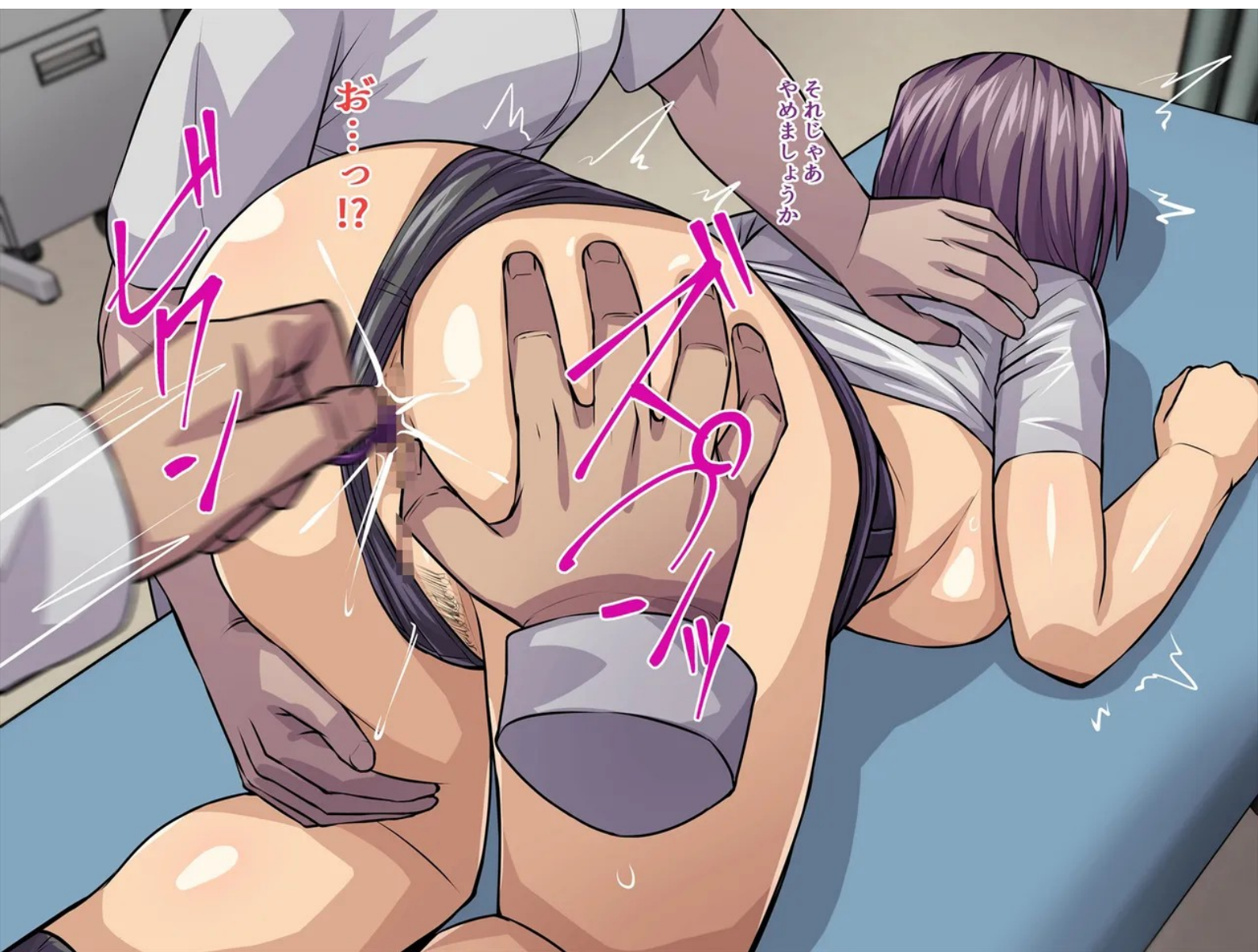
あ...ぐ...ああつ

ニチャ

ズタタ...

ハッ







ん？
どうしたいのかな？

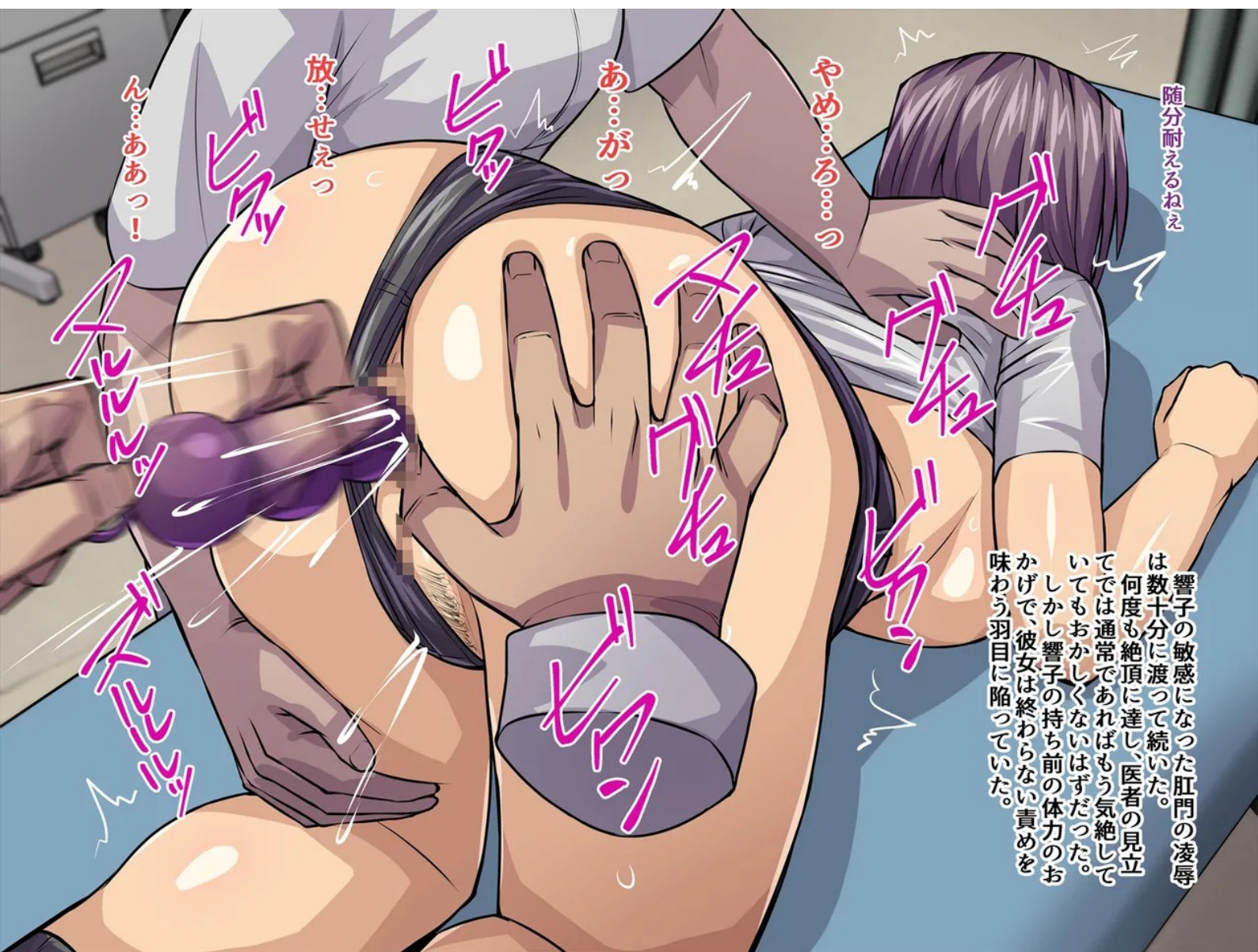
んああっ！

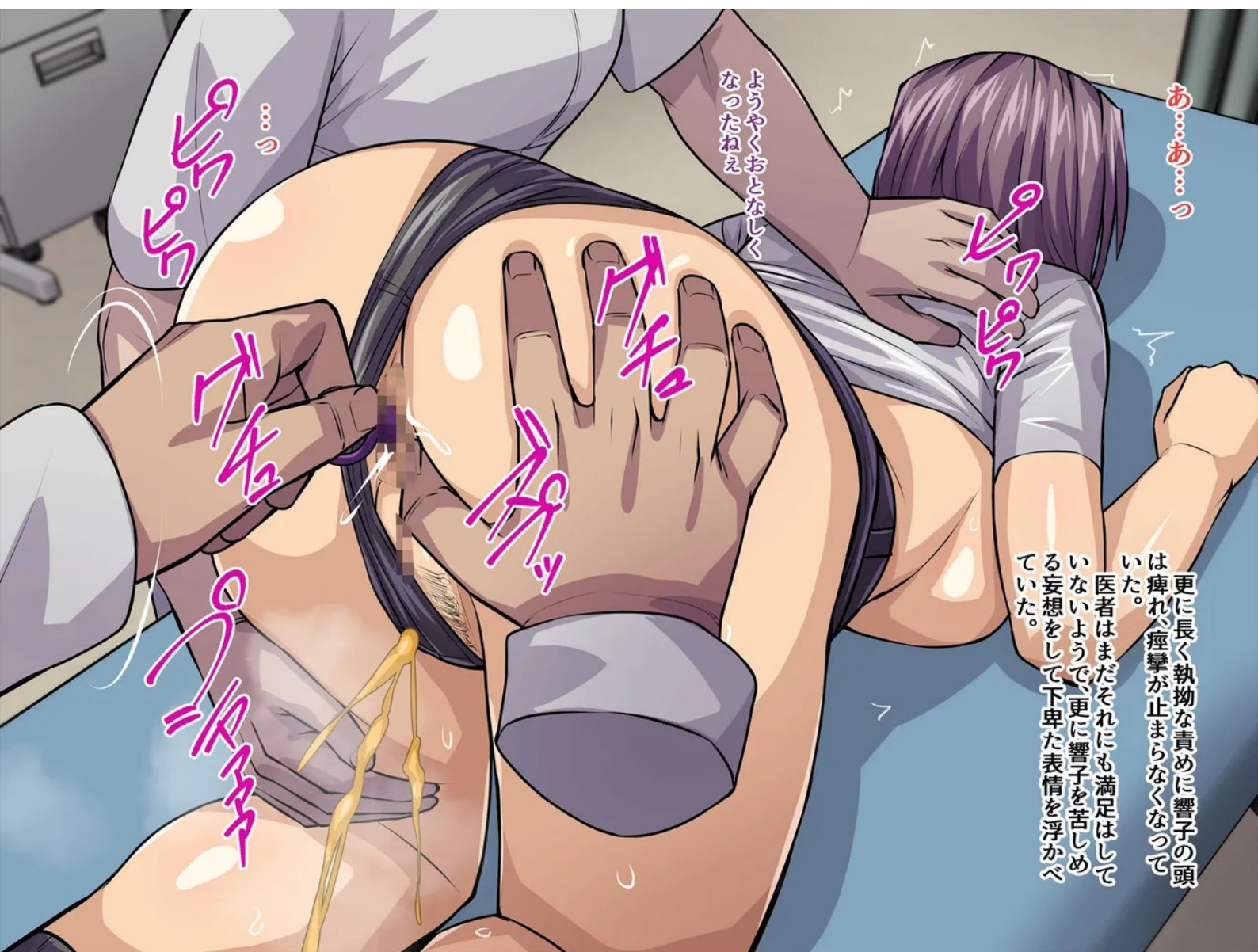
患者さんの希望は
聞いてあげないとねえ

やめ…ああっ！

あ…がああっ！

んん？
ハッキリ言ってくれないと





それにしてもまだ意識を保ってるなんてねえ

は...放せ...っ

どれくらい耐えられるのか興味湧いてきたねえ

...くっ

絶対に...倒してやるぞ...っ

自分の敵を明確に認識した響子だったが、しかしそのタイミングは最悪だった。響子は何んとか意識を保ちつつ、しかしそれでも反撃の機会を逃すまいと気を張っていた。

ズン

ムン



ふふふっ
威勢がいいねえ

こんなに簡単に
倒してもつまらないし
チャンスをあげようか

何...っ

これに耐えて意識を
保つていられたら
君の勝ちってこと
にしようじゃないか

な...なんだ...それ...
マッサージ機...?

若いから肩こりに悩む
なんてこともなかった
だろうねえ

アッ

カッ
カッ







医者のいう勝負はいつまで続くのか、電動マッサージ機による責めはしばらく続いた。
その穴にマッサージ機がぐりぐりとねじ込まれ、その先端は長い時間をかけてゆっくりと穴の中に沈み込んでいく。
そしてその間も、響子の絶頂は止まらなかった。

あーっっっっ！

んんんっっ！

んんんっっ！

んんんっっ！



随分だらしない顔に
なったねえ

どれだけの時間が経ったのか、
響子の粘液の溢れる穴の更に深い
場所にマッサーシ機の先端が入り
込み、その穴の形が大きく変形し
ていた。
何度も何度も絶頂しつつ響子は
まだギリギリで意識を保っていた
が、しかしそうやって耐えていら
れるのも時間の問題だった。

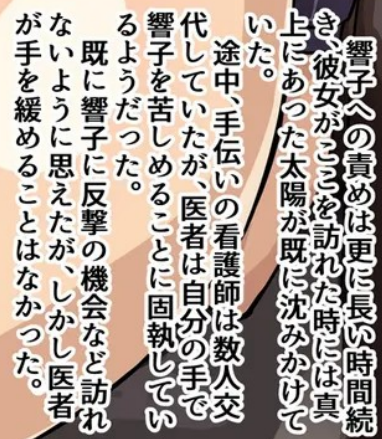
お…ほ…おっ

んお…おおおっ！

お…ああっ！



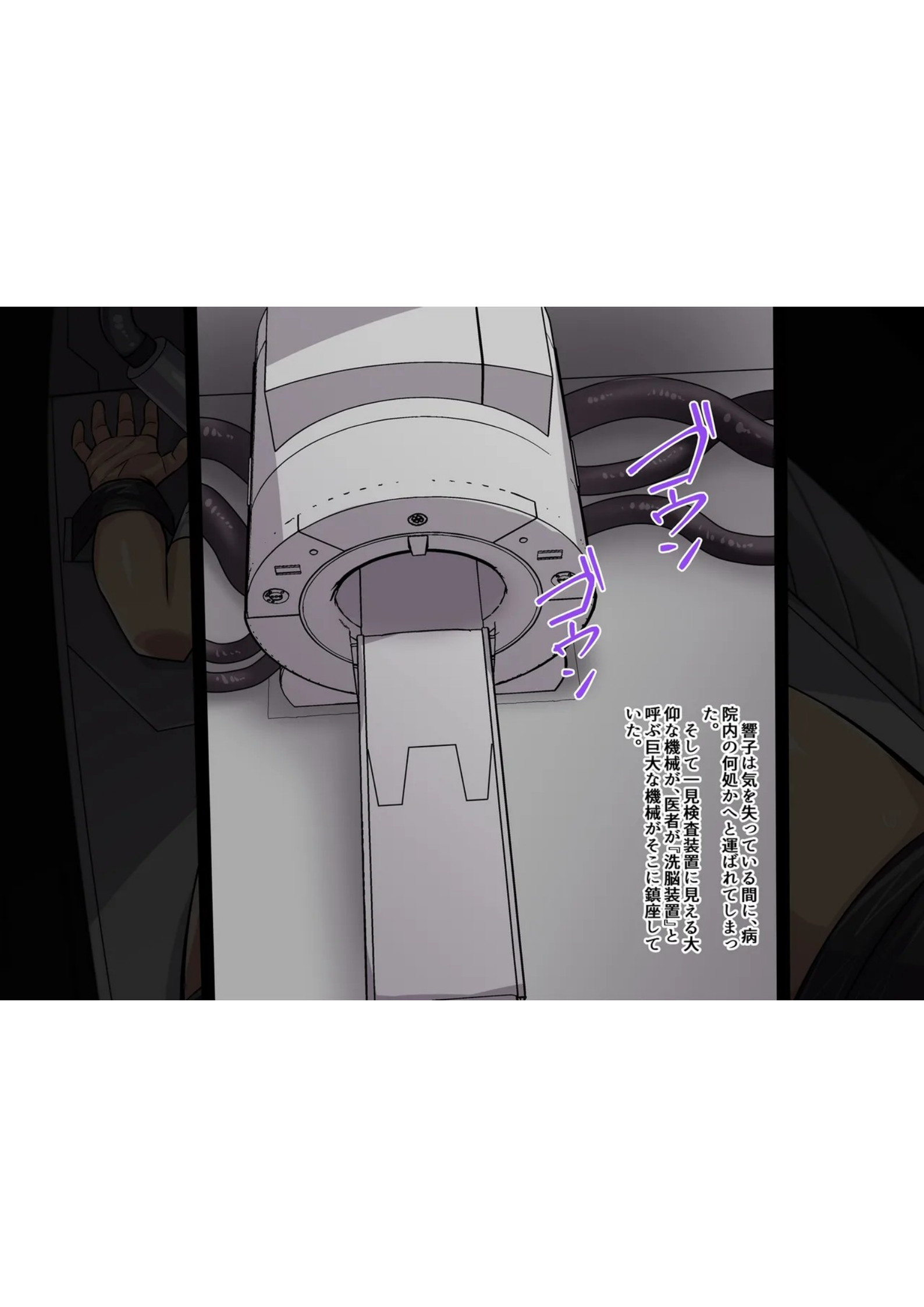








医者なりの何かの判断で、響子の尻穴を蓋するモノが引き抜かれた。
蓋をするモノがなくなり、響子は絶頂しながらその中に詰め込まれた媚薬ゼリーを床にまき散らした。
響子の意思とは裏腹に身体は強烈な快感と解放感を同時に覚えた。とうとう響子は気を失ってしまった。



響子は気を失っている間に、病
院内の何処かへと運ばれてしまっ
た。
そして一見検査装置に見える大
仰な機械が、医者が「洗脳装置」と
呼ぶ巨大な機械がそこに鎮座して
いた。

一方その頃…

キョーコさん
遅いなあ

なんか時間かかって
るのかな

アッ

それよりちゃんと
病院行ったのかな…

そろそろお店閉める
時間だけだなあ

響子はこの日、信頼する従業員
の夏美に店を任せていた。
他にも数人のアルバイトで店の
営業をしていたが、その誰かが店
長の響子にピンチが訪れていると
は思っていなかった。

カキ



カキ

響子は辛うじて気絶から回復してはいたが、薬物の影響か意識は朦朧としていた。
彼女の視界には明滅するカラフルな映像が映り、同時に耳鳴りのような音が聞こえていた。
その間にも身体は凌辱され、そして絶頂の瞬間の寸止めが機械的に何度も繰り返された。

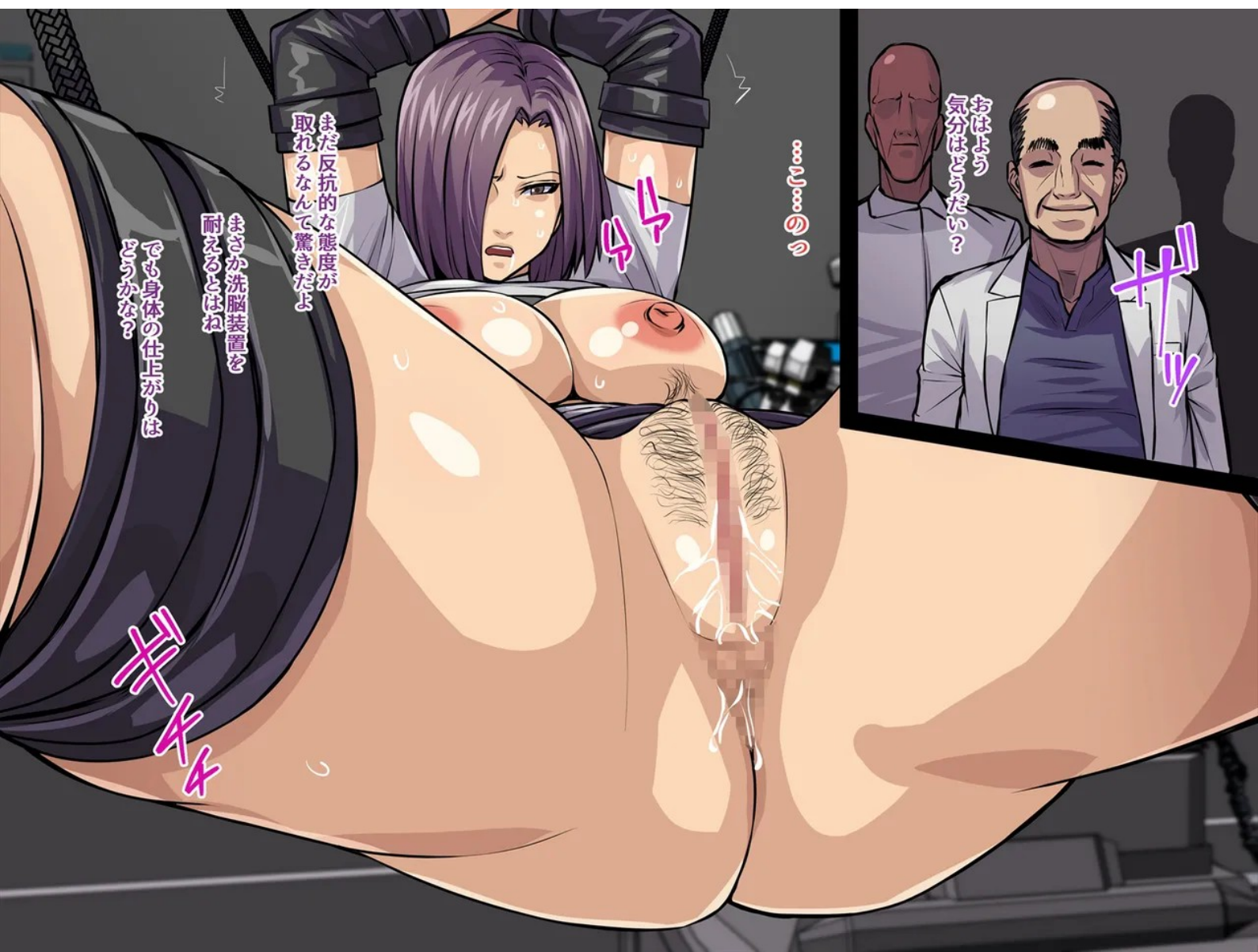




日が暮れてからの更に数時間が
これに費やされ、監視していた医
者や看護師たちもこの部屋からい
なくなっていた。
孤独な部屋で機械音だけが響き、
そしてまた日が昇るまで身体の開
発は続いた。



響子の意識が徐々に覚醒し始め、
突如として強い光が視界に飛び込
んできた。
ぼんやりとした視界に人影のよ
うなものが蠢いて見え、その輪郭
が徐々にくつきりとしたものに変
わっていく。



まだ反抗的な態度が
取れるなんて驚きだよ

まさか洗脳装置を
耐えるとはね

でも身体の仕上がりは
どうかな?

。。。。。。

おはよう
気分はどうだい?

X44



イキたくて仕方ないんじゃないかね？

だま…れ…っ

この指が挿入されたら
どうなるか想像できるかな？

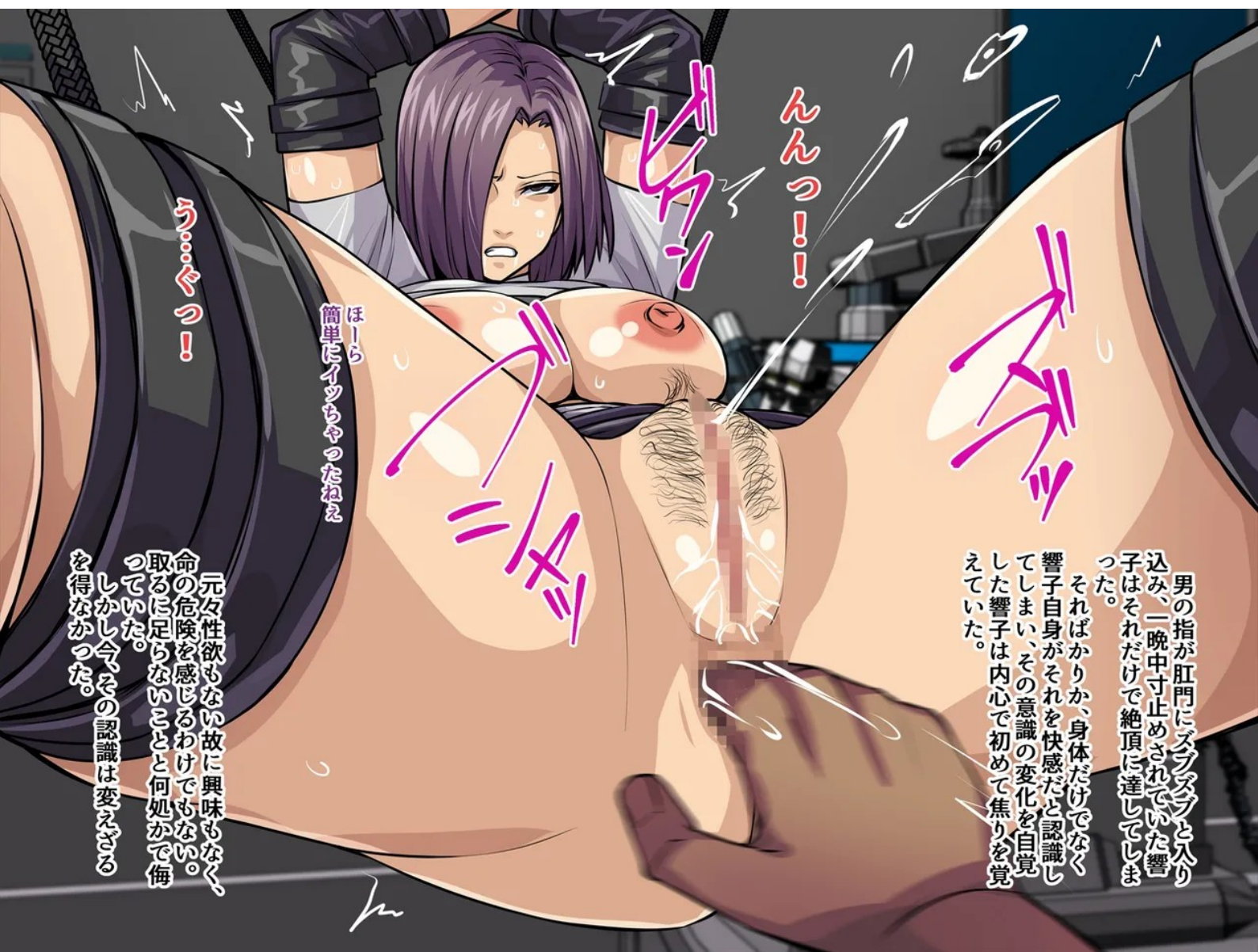
…くっ
やめ…るっ

セッ
ッ

ッ
ッ

スッ
ッ

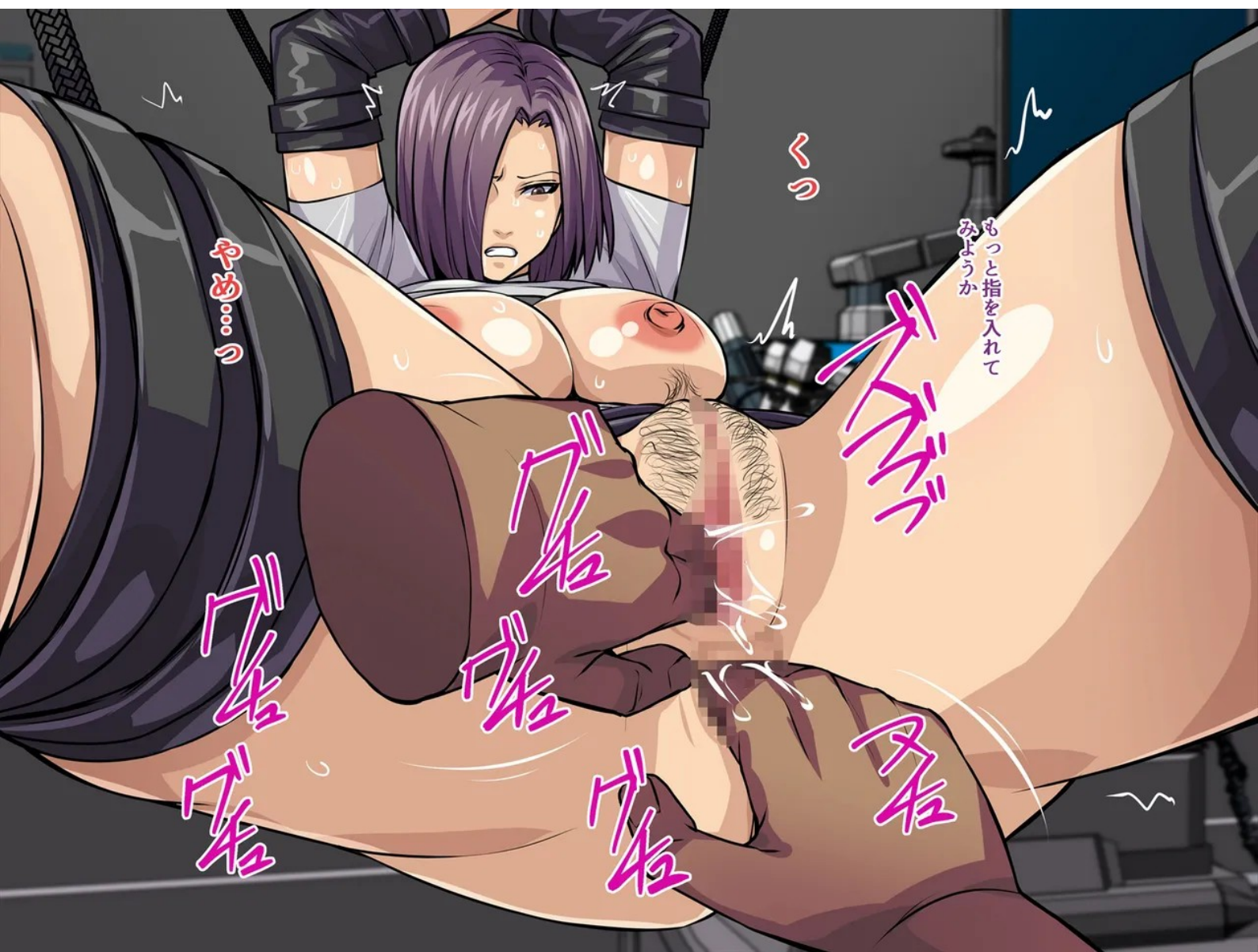
ギ
ン



男の指が肛門にズブズブと入り込み、一晩中寸止めされていた響子はそれだけで絶頂に達してしまっただ。
そればかりか、身体だけでなく響子自身がそれを快感だと認識してしまい、その意識の変化を自覚した響子は内心で初めて焦りを覚えていた。

元々性欲もない故に興味もなく命の危険を感じるわけでもない。取るに足りないことと何処かで侮っていた。
しかし今、その認識は変えざるを得なかった。

ほーら簡単にイッちゃったねえ



もつと指を入れて
みようか

やめ...し

くっ

ググググ

グググ
グググ

ググ
ググ

ググ

ググ



玩具みたいで
楽しいねえ

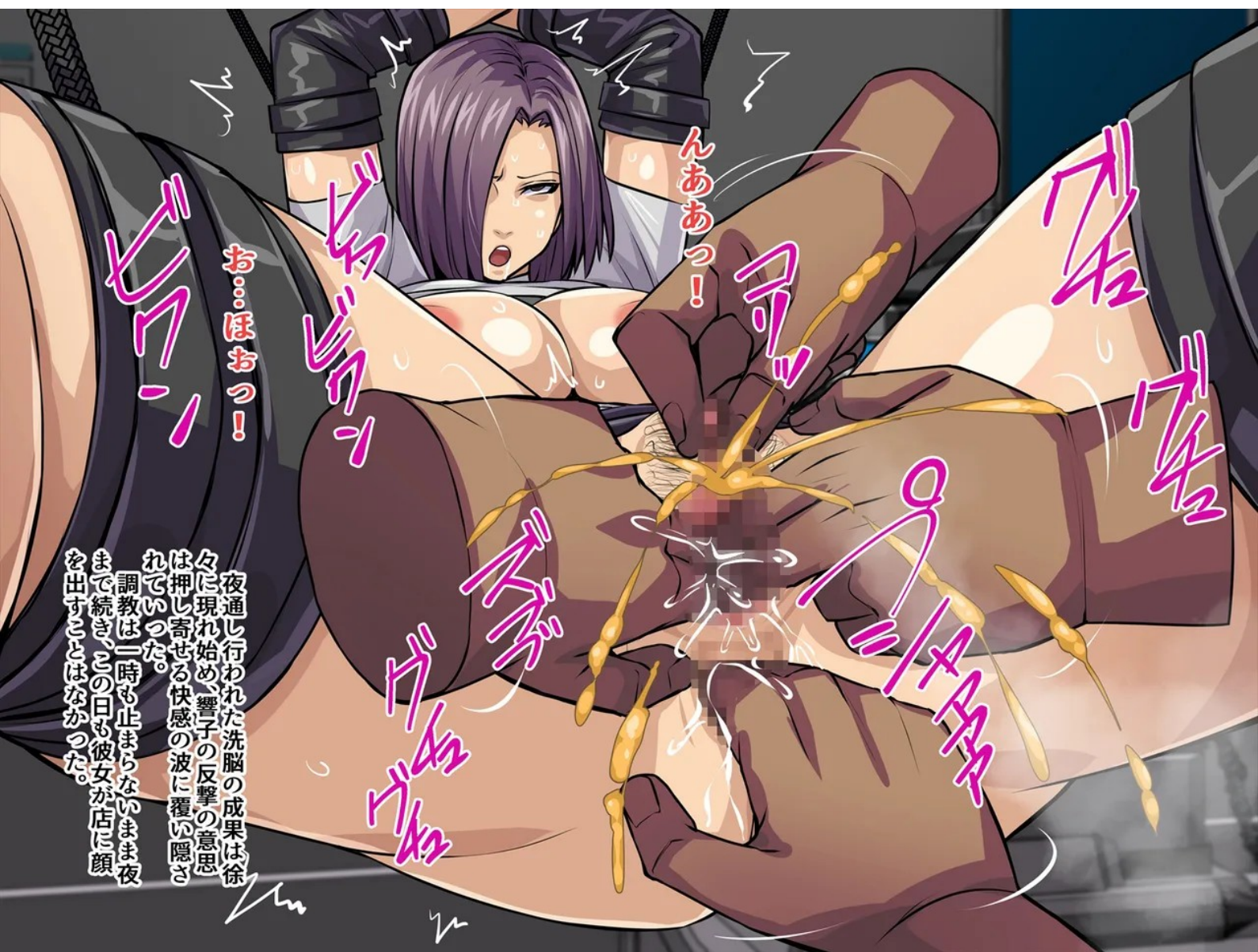
んんんっ!

ううっ!

グッ
グッ
グッ

グッ
グッ
グッ

グッ
グッ
グッ
グッ
グッ
グッ



なんだか今日お客さん
少ない…っていうか
来ないなあ

キョーコさんも
来ないし…

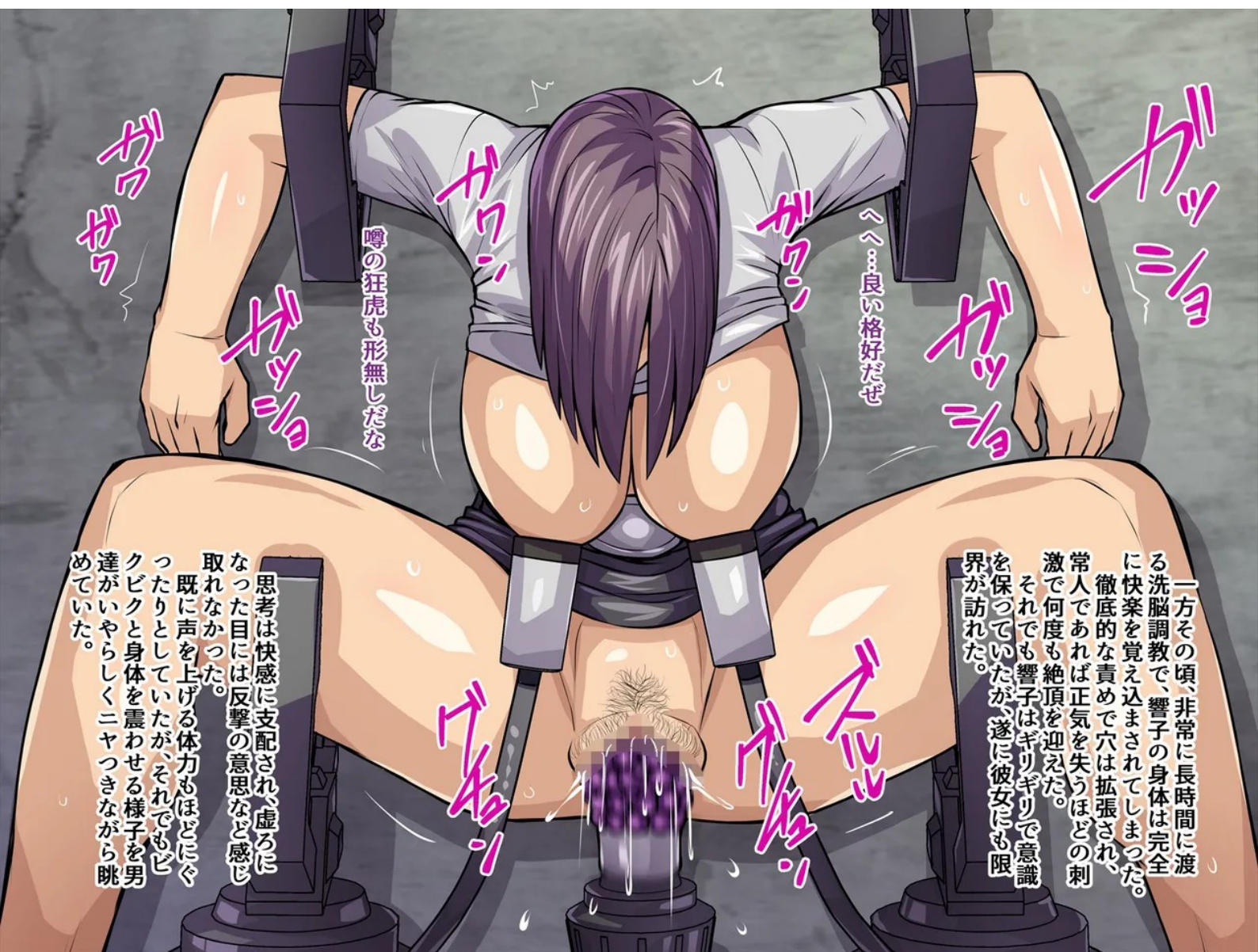
何やってるのかなあ

アッ

なんか今日…
暇だなあ

カー
カー
カー

響子を待ちつつこの日も店を開
けていた夏美だが、その響子と連
絡がつかないことにほんの少しだ
けモヤモヤした一日を過ごしてい
た。
響子がいらないことを除けば夏美
にとつては穏やか過ぎるくらいの
一日で、この平和な世の中に感謝
すらしていた。
しかしその裏で、無敵のヒーロ
ーである響子が窮地に陥っている
など一ミリも想像していなかった。



一方その頃、非常に長時間に渡る洗脳調教で、響子の身体は完全に快楽を覚え込まれてしまった。徹底的な責めで穴は拡張され、常人であれば正気を失うほどの刺激で何度も絶頂を迎えた。それでも響子はギリギリで意識を保っていたが、遂に彼女にも限界が訪れた。

噂の狂虎も形無しだな

へへ…良い格好だぜ

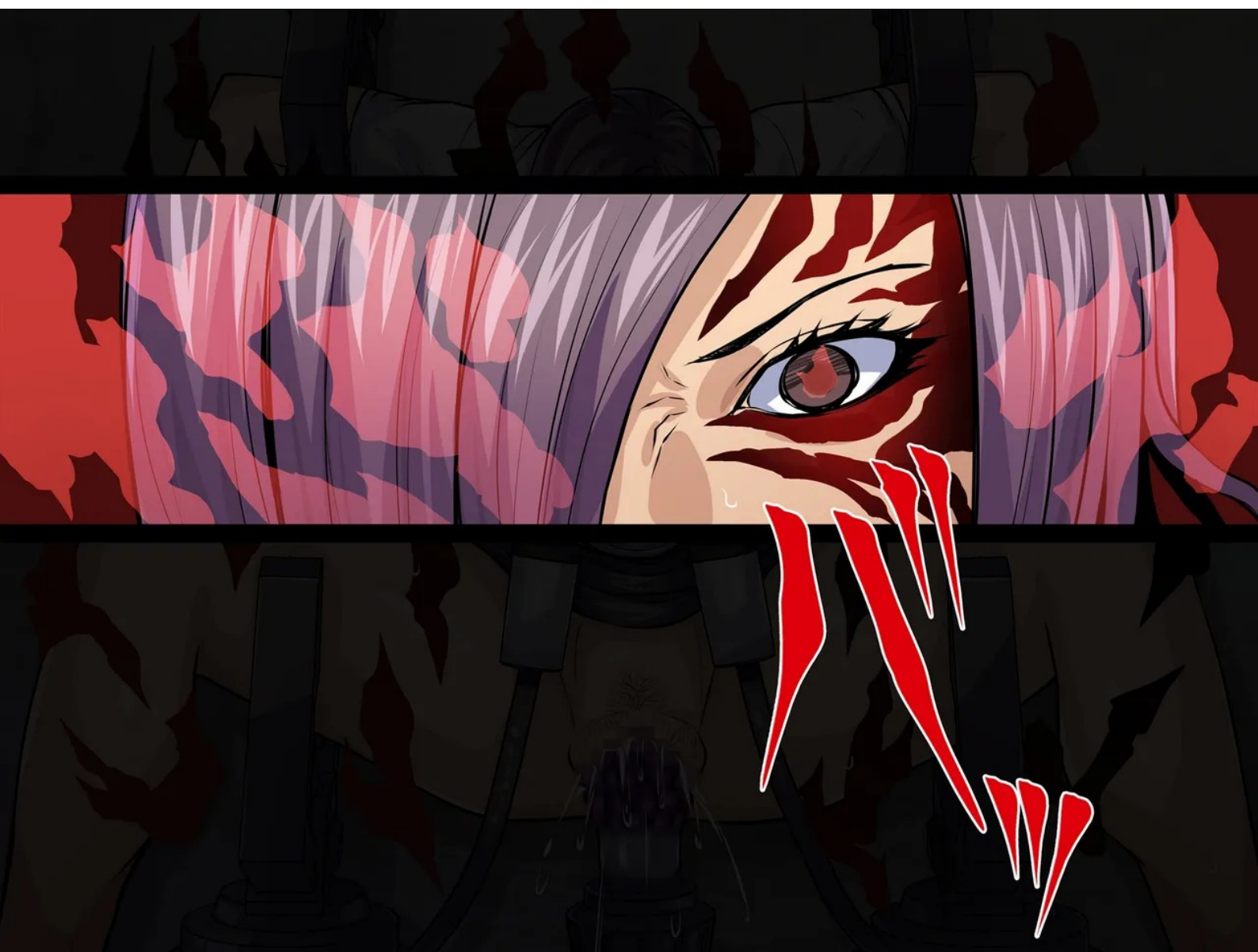
思考は快感に支配され、虚ろになった目には反撃の意思など感じ取れなかった。既に声を上げる体力もほとんどなかったりとしていたが、それでもビクビクと身体を震わせる様子を男達がいやらしくニヤつきながら眺めていた。



なんだ...?
なんか...息苦しく...

しかしその時、響子の身体に異変が起きた。
どす黒いオーラが響子の身体を覆い始め、部屋の空気までもがズシリと重くなる感覚があった。
何かまずいことが起きている。
男達がそう直感した時には男達の身体は何故か硬直し、その場を動くことができなかった。

響子の身体を覆うオーラがまるで虎のような模様を作り出し、次の瞬間、虚ろだった目にキラリと光が灯った。



ズドン

一瞬、爆弾が落ちたような轟音と共に建物が大きく揺れた。音は病院の周辺にまで届き、音を聞いた野次馬が集まってきた。しかし音もその二度きりで、野次馬は怪訝な顔をしつつそこから離れていった。





病院内の一角、通常の職員では入れない特別な場所に凄惨な光景が広がり、その中心に響子はいた。まるで猛獣が暴れたかのような破壊が行われ、そこに倒れる全員が瀕死の重傷を負っていた。その後、別の職員がこの場所に様子を見に来た時には既に響子は姿を消していた。結果として、この事件は病院関係者の内々で処理され、表に出ることは無かった。

しかし数日後、病院関係者が次々と謎の失踪を遂げ、遂には病院の悪事が明るみに出ることになる。

後に響子は気が付くと、自宅の玄関にボーツと立っていた。病院に入つたところから今までの記憶がボツカリと抜け落ち、そして極度の疲労を感じていた。

翌日、疲れの癒えた頭でその抜けた記憶を探ってみたが、結局何も思い出すことはできなかった。しかし何故か病院というものに對する嫌悪感が強く残り、その後の人生で彼女が病院を頼ることとは二度もなかった。